

考古学特殊研究 国分寺瓦の研究（2・3）

研究史概観

★研究前史

- ・ 美しい文様をもつ軒丸瓦・軒平瓦については、古くから好古家の間で注目され、花入や硯などに転用される。
- ・ 蒐集家の登場と『古瓦譜』の作成。
- ・ 藤原貞幹（ふじわら・さだもと 1732～1797）の『古瓦譜』主に平安京で出土する刻印瓦を中心に集成。歴史的な序列も意識した作り。ただし、偽造された拓本も多いことが判明している。

★関野貞（せきの・ただし 1868～1935）の研究

- ・ 東京帝国大学工科大学教授。建築学者。
- ・ 奈良県での古社寺の調査研究や、朝鮮半島の古蹟調査などから、瓦についても正確な記録を残している。
『雄山閣考古学講座 瓦』（1928）
建造物の年代判定の材料としての瓦編年作業を行っており、ほぼ的確な年代観。しかし、年代判定に至る方法論は記載されず。

★石田茂作（いしだ・もさく 1894～1977）の研究

- ・ 奈良国立博物館館長。仏教考古学の基礎を築く。
- ・ 法隆寺若草伽藍の発掘調査を行い、再建非再建論争に終止符を打つ。
- ・ 主著『総説飛鳥時代寺院址の研究』（1944）
- ・ 瓦の年代判定に際して、「引き算」を用いる。
（飛鳥時代創建寺院出土瓦）－（奈良時代創建寺院出土瓦）＝（飛鳥時代の瓦）
- ・ また、分布論についての嚆矢となる研究を行う。
「奈良時代の文化圏に就いて」（『考古学雑誌』 16-1 1926）
「奈良時代の宇瓦に就いて」（『寧楽』10 1928）
古代寺院遺跡の分布から奈良時代の文化圏を四分し、条里制の施行や礎石の形状、伽藍配置、軒瓦などの分析から、文化の流れを歴史的に叙述。
特に瓦については、文様・周縁・断面形態のそれぞれを型式分類し、周辺地域における「文化の遅れ」を抽出した。
「古瓦より見たる日鮮文化の交渉」（『仏教考古学論叢』東京考古学会 1941）
朝鮮半島の瓦と日本の瓦の比較検討を行い、各種瓦の国内での分布状況の相違について論じ、「帰化人」を媒介とする文化圏を想定した。
- ・ 系統を明らかにするために型式分類を行い、文化伝播の様相を検討することにより歴史的叙述を行う姿勢。

★藤沢一夫（ふじさわ・かずお）の研究

- ・代表論文「摂河泉出土古瓦の研究」（『仏教考古学論叢』東京考古学会 1941）
- ・当時、森本六爾や小林行雄などによって進められていた、弥生式土器の様式研究を、古瓦研究において応用した論文。
- ・軒瓦の「内区」と「外区」の文様をとりあげ、内区文様が時代を通じて基幹となる文様構成を変えないのに対し、外区は年代を鋭敏に反映することに着目。
- ・外区文様の変化を、時期的意義をもつ分類概念である「期類」、内区文様を、基幹系統を反映する「系類」とし、両者の織りなす座標上の点として、「〇〇寺式」と呼ばれる諸瓦群を位置づけていく。
- ・そのうえではじめに、各瓦の系統・伝播状況について論を展開していく。
- ・属性ごとの特徴を把握・整理し、年代論系統論的に配列するという手法が、理論的に整理されたことは、他の遺構・遺物にも援用可能な手法として重要といえる。

★分布論的研究の隆盛：「氏族」と「官」が伝播のキーワードに。

☆代表的各論

- ・八賀晋「地方寺院の成立と歴史的背景—美濃の川原寺式瓦の分布—」

（『考古学研究』20-1 考古学研究会 1973）

美濃における川原寺式軒瓦の分布が前代の「部」の分布と相反すること、壬申の乱時に名前が出る氏族との関連が強いことから、乱後の論功行賞との関係を想定。

- ・鬼頭清明「法隆寺の庄倉と軒瓦の分布—忍冬唐草文軒平瓦について—」

（『古代研究』11 元興寺仏教民俗資料研究室 1977）

法隆寺式軒平瓦の地方分布を調べ、法隆寺の庄倉が存在した地域と重なることを確認し、法隆寺と庄倉との支配隷属関係を媒介に瓦が移動したと論じた。

☆総論

- ・森郁夫の研究：『日本の古代瓦』（1991 雄山閣）

『日本古代寺院造営の研究』（1998 法政大学出版社） など

奈文研考古第三室長・京都国立博物館での業務を通し、全国各地の瓦を精力的に分析検討。瓦当文の分布論の上に、律令国家の成熟過程や対地方政策、国家仏教の展開など、積極的な歴史叙述を重ねていく。

「瓦当の文様構成はそれぞれの寺院の特徴を示し、文様構成の系統を究めることによって寺院の造営事情を究明できるものであり、軽んずることはできない」

「瓦当文様が単に文様として存在するものではなく、寺院造営時の政治的状況をあらわしやすいものとの見解をもっている」

「瓦当文様に表れた現象は、たまたま瓦にみられるにすぎないのであって、寺院造営に要する他の技術すべての分野に共通していたはずである。なぜなら、造営工事に必要な技術はセットとして移動したからである」

このようなスタンスは、以後の研究者にとって研究の前提となる。

★製作技法からの分析：工人論

- ・嚆矢としては、島田貞彦『造瓦』（1935）など。
沖縄に残る造瓦技術の民俗例を紹介。
- ・戦後、考古学における技術論の高まりに伴い、瓦や寺院の専門家ではない考古学者により、考古資料・文献史料・民俗例を総合した著名な研究が行われる。
小林行雄「屋瓦」（『続古代の技術』 1964）
佐原真「平瓦桶巻作り」（『考古学雑誌』 58-2 1972）
- ・他方、瓦研究者でも、軒瓦の接合技法や窯構造などを中心に関心が高まる。
木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」（『延喜天曆時代の研究』 1969）
大川清『日本の古代瓦窯』（1973）
- ・分布論的研究との融合
製作技法的研究が重視されるようになると、従来の文様による分布圏と製作技法論を融合させることにより、製作者集団の活動域を復原する研究が行われるように。
菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」（『史林』 69-3 1986）
以後、文様と製作技法は瓦研究の両輪に。

★集成作業の進展

- 全国的な資料増加に伴い、集成作業が必須となる。
その際、同文瓦を範の差異で区分するなど、詳細な型式学的研究の基礎資料となる。
- ・全国：奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』（1970）
 - ・都城：奈文研『奈文研基準資料 瓦編』（1974～1984）：平城京の瓦を中心に。
平安博物館『平安京古瓦図録』（1977）
 - ・大寺院：四天王寺文化財管理室編『四天王寺古瓦聚成』（1986）
法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝 瓦』（1992）
 - ・地方：石田茂作監修『東北古瓦図録』（1974）
九州歴史資料館編『九州古瓦図録』（1981）
 - ・古代寺院＋古瓦資料：北陸古瓦研究会編『北陸の古代寺院』（1987）
小笠原好彦他『近江の古代寺院』（1989）
 - ・研究会・シンポ資料：京都国立博物館『畿内と東国の瓦』（1990）
東海埋蔵文化財研究会『古代仏教東へー寺と窯』（1992）
関東古瓦研究会『関東の初期寺院』（1997）
奈文研『古代瓦研究Ⅰ・Ⅱ』（2000・2003）
 - ・蒐集資料：廣田長三郎編『古瓦図考』（1989）
田熊信之他編『古瓦集成 宇野信四郎蒐集資料』（1995）
（財）京都市埋文研『木村捷三郎収集瓦図録』（1996）

★年代観の細分化

- ・ 地方寺院：中央大寺と異なり文献記載のない逸名寺院が殆ど→年代の決め手なし
一般的に、年代のわかっている中央の瓦との類似性を年代判定の基準にする。
山田寺式単弁蓮華文瓦→7世紀中葉が初現～7世紀後半に地方展開
川原寺式複弁蓮華文瓦→7世紀第三四半期が初現～7世紀末頃にかけて地方展開
- ・ 高度成長期を通して、特に地方を中心に、寺院の発掘調査が多く行われる。
逸名寺院のさらなる増加。地方内での各寺の詳細な年代が求められる。
- ・ 「形式化」という概念
文様は模倣していくに従い、だんだん崩れていくという判断に基づいた編年作業。
本来は直接的模倣関係にしか適用できない概念。
しかし、これを同様式のすべての瓦に適用するという誤り。
- ・ 細分化の進行と様式概念の見直しの動き
奈文研「古代瓦研究会」における最近（2000）の提案：
「山田寺におけるオリジナルの山田寺式（蓮子 1+4or5、直立縁、三 or 四重圈縁）
認定条件をクリアできない地方の瓦には、異なる名称を与えるべきではないか」
←→上原真人「〇〇寺系列山田寺式」の呼称（『日本の美術 359 蓮華文』1996）

★造瓦組織論の萌芽と展開

- ・ 小林「屋瓦」では、おもに文献史料を用いて、東大寺造瓦所における、労働人数や作業能率など詳細な工房の様相を描写。
分布論とは別に、瓦工房（瓦屋）の運営形態を復原する研究にも注目される。
前者がおもに軒瓦を用いたのに対し、後者は数量的に統計処理に耐えうる量が確保できる、平瓦・丸瓦を研究材料として用いることが多い。
- ・ 五十川伸矢「古代瓦生産の復原」（『考古学メモワール』1980）
『丹波周山窯址』（京都大学考古学研究室 1982）
平瓦・丸瓦の属性分析から、工房内で働く工人（集団）の数を抽出し、その変化を時間軸上で追い、時期ごとの工房のあり方の変遷を復原した。
- ・ 上原真人「天平一・二・三年の瓦工房」（『研究論集Ⅶ』奈文研 1984）
恭仁宮などで出土する刻印人名瓦の人名別・刻印別諸属性を抽出し、恭仁宮の瓦屋で労働に携わった瓦工の人数・分業体制・労務管理体制（正職人と臨時職人、賃金の支給方式など）を復原した。
- ・ また、瓦に限らない、手工業生産体制の総合的復原も試みられる。
北陸古代手工業研究会『北陸の古代手工業生産』（1989）
須恵器・瓦・製鉄・製塩など多岐にわたる分析。「手工業生産センター」としての一括した労務管理を復原（宇野隆夫）。
- ・ 分布論に比して概して低調であり、資料操作の煩瑣さなども手伝って、90年代には見るべきものが少なくなる。生産地（瓦窯）の発掘調査の際に企図されるのみ。

研究史における問題点

★瓦当文研究を中心とした、分布論的手法について

**「瓦当文」は「寺の造営事情を反映する」(森郁夫氏)という前提は、
本当に正しいのか？**

- ・「瓦当文の共通性＝同一または近い関係の氏族」という議論

明らかに同一系譜の氏族が、異なる瓦当文を用いる例、またはその逆。
同一寺院に、複数系統の瓦当文が採用される例。(ex.大津北郊の諸寺院群)

- ・中央系瓦当文を採用した寺院(or 国)は、中央との関係が強いという議論

周辺国に比して中央との関係が強固にもかかわらず、

在地系瓦当文を採用する例。(ex.備前・備中・美作国分寺の瓦)

軒平瓦が中央系にもかかわらず、軒丸瓦が在地系の例、またはその逆。

(ex.駿河片山廃寺(駿河国分寺)の瓦)

瓦当文は突き詰めてみれば、あくまで単なる「模様」に過ぎず、
過大評価は避けるべきと考える。

製作技法からの分析をプラスした昨今の研究：分布域を「工人の活動域」として
具象化できる点には意義。しかし、その分布の背景は依然として「氏族」と「官」。

山崎信二氏のアンチテーゼ(「平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する
基礎的考察」文部省科学研究費一般研究C 1994)

「8世紀の軒丸瓦・軒平瓦で、平城宮出土例に類似した瓦当文様の瓦を平城宮式と
か平城京式と呼び、そのような平城宮系の軒瓦を生み出す背景として、官との強力
なつながりや官からの技術的な援助などが指摘されている。しかし類似した瓦当文
様なるものは、それを禁欲的に言えば、文様が単に類似しているにすぎないのであ
って、官との強力なつながりや官からの技術的な援助があるかどうかは、別に論証
すべき細かい手続きが必要なのである。なるほど過去の瓦の論考のうち類似した瓦
文様が波及する意味についての結論は、あるいは一部(あるいは半分程度)につい
て事実が指摘されているかもしれない。しかしそれは文献史学による分析の結論が
先にあって、瓦はその結論を援用する素材に利用されているにすぎないのである。」

この意識は正しい。しかし山崎氏の研究自体は、製作技法も含めて中央地方の瓦を厳密に検証することで、瓦に表れる中央の影響力を狭く捉えるという研究であり、手法それ自身の斬新さには欠けると言わざるをえない。

では、どうすればいいのか？

私の研究手法

★「造瓦組織論」重視を提唱

- ・瓦と瓦を直接広域的に結びつけようとするから、そこにさまざまな前提が必要となり、矛盾が生じる。

まずは一つの窯・寺・地域・国あたりの小範囲の瓦を総体的に捉えることによって造瓦システムを復原し、それを比較していけばどうか。

つまり、瓦を比べるのではなく、生産組織のシステムとしての成熟度＝目的に対しての効率化の度合や、状況に合わせたシステムの変容の過程を、地域軸および時間軸の中で比べていくという手法である。

- ・そういった手法をとることで、瓦の生産システムを他の工業生産品の生産システムと比較していき、その相違に意味を見出すことも可能となる。

「瓦は当時の政治的・社会的諸様相を代表・反映する」という思想では、他分野との接点はない。瓦からわかるのは所詮瓦のことでしかないという自省をもちつつ研究を進めることによって、それ以上のことが見えてくる。

★具体的な資料操作について

- ・瓦を総合的にみていく研究

軒丸・軒平・丸平・その他道具瓦は、それぞれの考古遺物としての特性から、研究にあたっての方法論は相違するかもしれないが、寺院造営全体の中では当然ながら等価であるべきであり、軒瓦の来歴のみをもってすべてが語れるわけではない。

瓦によって来歴や展開が異なる場合、それ自体に意味を考えていくべき。

←→「造寺技術はセットで移動」（森郁夫氏）

- ・数量比という概念：「主要瓦」と「流用瓦」の区別

分布論では「ある」ことのみが重要。私の研究では、「どのくらいあるか」「どういう契機で作られ、持ち込まれたか」に着目。瓦は単なる屋根葺材にすぎないのだから、足らなければどこか余所の寺から調達してきていても不思議ではない。